

病さは一匹ずつ違う。慣れるのに時間かかるやつもいれば好奇心旺盛なやつもいる。クリスマスのなん百個って点滅してるイルミネーション点灯したら寄ってくるイノシシやオオカミの糞尿のニオイなんて大好きなんだけど、最初だけちよっと警戒することもあ

る。 買うな使うなどは言えないけど、所詮はその程度って覚えておいてほしい。

カラスは状況判断できる

あたしね、数年前に刈払い機でカラスの首はねたことある。

あたしが草刈り始めると近くの電柱にとまって、刈払いで追い出された虫やカエル狙い。

そのうちに刈払い機使ってる間はあたしの両手はふさがっていて、花火とか石とか棒もって追い払いが得意な

って覚えたい。そうないと電柱からみてるより刈払ってるあたしの後ろをついて歩く方が効率よく餌が食える。

クして手元がくるった拍子に斜め後ろにいたカラス切っちゃった。

雅ねえは見たら追ってくる怖いヤツだけど、刈払い作業中は追えないって状況判断できるその賢さが命とりになったのね。

慣れさせない工夫

昨年連載の7回目の『その他の防鳥グッズ』で紹介した爆発と同時にプロペラが打ちだされる鳥用爆音機やカラスの警戒時の鳴き声がランダムに流れる撃退器も、やはり音だから、ならせっぱなしでは慣れる。

爆音機は時々場所を移動させ、撃退器も音源のスピーカーは隠してどこから聞こえるのかわからなくしたり、時々つまみを切り替えて単独カラスの声と団体カラスの声を切り替えるなど、慣れさせない工夫が大切。

究極の対策はネット

「究極の対策はやはり防鳥ネットですよ、中で作業もできるような網室にできれば完璧！」って話すでしょ。

あたしと一緒に島根で獣害

対策やってる婦人会のおばちゃんたちは「うん、すぐやるからさっそく今年も今からブドウにネットかける、カキはまだ先でいいや」っていう。

よそでは「それはなかなか大変、多分無理です。果樹全体にネットかけるとなると大仕事だから」っていう。

どうしてそんなに【差】があるのかというと島根のおばちゃんたちの畑はカキもブドウもミカンも最初からネットかけることを前提とした植え方をし、毎年ネットをかけた

り除去したりすることを前提とした樹形つくりと剪定やってるから。 さっさとそういう守れる畑（写真が島根のおばちゃんたちの畑）に変えておくのがこれからの持続可能な長獣害対策ってこと。



▲年間約1,000人の視察者が訪れる美郷町婦人会の獣害対策研修農場



▲果樹や野菜も低い位置で誘引・剪定されている

次回は春までにやっておきたい獣害対策の話するね!



講師紹介 井上 雅央 氏

1949年、奈良県出身。愛媛大学大学院農学研究所修士課程修了、京都大学博士(農学)。元農研機構 近畿中国四国農業研究センター鳥獣害研究チーム長。退職後、同センター専門員。宮崎県、熊本県、広島県、静岡県などでアドバイザーとして継続的に活動。著書に、『それならできる獣害対策』『山の畑をサルから守る』『山と田畑をシカから守る』『60歳からの防除作業便利帳』『ハダニ』『女性がすれぱずんずん進む獣害対策』(いずれも農文協)など多数。

